

社会の発展法則、必然性

司会：今回は、宮田光市東京北部県協
事務局長のレポートで「社会の発展法
則、必然性」を学んでいきます。

それでは、宮田さんお願いします。

人類は自然の中から誕生した

宮田：チャールズ・ダーウインの『種
の起源』が出た当時、キリスト教をは
じめ宗教の経典は、人間の祖先は神に
よって作られたのであり進化論は神を
冒瀆するものだと非難しました。その
ために、進化論は世の中からはじま
されました。

しかし、今日では、自然科学の発達
が進化論の正しさを立証してくれてい

ます。

人類の祖先は、アフリカの熱帯雨林
に高度の進化をとげ、樹上生活をして
いた猿の一種です。なんらかの地球規
模の気候変動で地上におり、二足歩行
を始めたことが猿から人間への移行に
とって決定的な一歩となりました。

四足歩行の猿が、地上におり二足歩
行で何が変化発展したかです。まず一
つは、前足が解放され「手」となり、
木の実や果実、小動物や小魚などを
つかみ取る、食べ物採取の道具の役割を
しました。この行為をマルクスは、
「労働」と呼びました。二つ目は、直
立歩行から頭は両肩の上のるよう

なり、労働による刺激で脳は次第に発
達します。このように樹上生活する猿
から人間社会ができるまでの数百万年
を要して脳は発達してきたのです。

地上におりた人類の祖先は、他の動
物たちからすれば小さな生き物です。
肉食獣や大きな動物たちから身を守る
ため、また、食べ物を採取するために
集団で身を寄せあい助けあつて生き
てきました。人類は、人種、地域の別を
問わず、余剰生産物を作り出すこと
できない生産力の低い段階の社会を、
すべて原始共産主義社会といいますが、
太古から数百万年もの間、ほとんど変
化・発展もしてませんでした。

図表 1 【五つの社会の特徴】

社会構造	はたらきて	生産手段	所有関係	生産物	分配
原始共産社会	集落民全員	棒や石等	共有	共有	平等に分ける
古代・奴隷社会	奴隷	奴隷そのもの	奴隷主	奴隷主	最低限の食料
封建社会	農民・農奴	田・畑＝領地	領主	領主	五公五民など
資本主義社会	労働者	機械装置など	資本家	資本家	賃金支給
社会主義社会	労働者	同上	共有	共有	将来的に平等

人間が生きてゆくための食料は、自然物からの狩猟と採取です。初期の頃は、当然素手です。採取できる量も種類も限られています。しだいに、棒切れを使う、石片を使うなど道具が改良され変化すると収穫量も種類も豊富になります。

このように、少しでも豊かに生きたいと願うと同時に、どうしたらそうなるか、常に考えて（目的意識的に）生活してきました。だから、何を生産したかではなく、何をもちて生産したか、いわゆる道具は何かで時代は分けられ変化し発展してきました。旧石器時代―新石器時代（日本の縄文時代）―弥生時代へと変化してきました。

剰余生産物が生まれ、

階級が発生

それまでは生産力が低く、集落民に平等で分け与えて暮らしてゆくのがやっとだったのが、道具＝労働用具の改

良によって生産物が多くなり、剰余生産物が発生するようになってきます。

そうすると、剰余生産物や主要な労働用具を独り占めするものが現れ、生産手段を所有するものと、所有できないものとの階級が分化し始めます。生産手段を所有するものが支配者階級となり、生産手段を持たないものが被支配者階級となつてきます。

*図表 1（上） 五つの社会の特徴

原始共産主義社会から

古代・奴隷制社会へ

原始共産主義社会から古代・奴隷制社会へ変化発展しました。社会の働き手は「奴隷」です。奴隷には人格は許されずに牛馬のごとく働かされました。生かすも殺すもまさに奴隷所有者者しだいです。典型的なのはギリシヤやローマなどの奴隷制社会です。日本の古代社会は、大和、飛鳥、奈良、平安時代をさします。日本全土を支配する古代

◆みんなの学習講座

国家が生まれたのは、645年の「大化の改新」です。

封建社会へと変化・発展する

次に生まれたのが、封建社会です。ヨーロッパでは、絶対王制、王朝の社会です。日本では、江戸幕府が特徴の殿様の時代です。

その特徴は、身分制度や階級制度がはっきり形作られています。主要な生産手段は広大な田畑です。これらの土地は領主である殿様・藩主のもので、農民は、その領地で自ら所有する鋤・鍬などの農機具で耕し作物を育てました。できた収穫物の一部（五公五民など）を年貢として収奪され、残った作物で家族が暮らしました。農民は領地を移動することも、農作物の選択も許されませんでした。

ブルジョアジーとプロレタリアートの二大階級に分化

次の社会は、現在、私たちが暮らしている資本主義社会です。4月号で学んだように、1649年、イギリスのピューリタン革命（ブルジョア革命）で資本主義社会が誕生しました。

日本は、世界に遅れること明治維新（1868年）によってブルジョア国家が成立しました。新たな明治政府は廃藩置県、富国強兵などの施策を強力に推し進め、日本資本主義社会の建設に取り組み今日に至っています。

1917年、

ロシアで労働者の社会が誕生

すでに、述べているように、レーニンの指導の下で、労働者（農民と連携し）が主人公の社会（社会主義社会が人類史上初めて誕生しました。

司会：宮田さんありがとうございます

た。地球上に人類が誕生してから「原始共産主義社会」「古代（奴隷制）社会」「封建制社会」「資本主義社会」「社会主義社会」と五つの社会を経験してきました。

何か、質問はありますか。

芳賀：五つの社会の特徴点を論理的に整理してほしいです。

宮田：私は、次のように整理しました。
(一) 人類が誕生した以降の

原始共産主義社会

① 剰余生産物がない社会で、社会構成員が生きていけるだけしか生産できない社会です。だから、すべての人々が平等に分け合う。それでなければ生きていけない、社会を維持できない時代が数百万年も続きました。

② 人々は道具を工夫し、改善し、土木技術を生み出し、永い歳月をかけて生産力を発展させてきました。

③ しかし、生産力の発展は剰余生産物を生み出し、それを手に入れるため

に、生産手段を独占する者と持たざる人々を生み出し、支配と被支配の階級社会へ変化してきました。

(2) 古代(奴隷制)社会

① 生産性があり、剰余生産物がでるようになる、その剰余生産物の一部の人が取得する、働かない階級が生まれる。

② 剰余生産物を独占した支配者は、力の弱い者を奴隷として労働させ、そのすべてを奪った。奴隷制社会、階級社会へと転換します。

③ 奴隷制とは、人そのものを所有する(牛や馬と同じ)、生産性が高がりません。また、奴隷所有者と奴隷の生産関係では、生産力の発展に対応できなくなり、生産力の発展が奴隷制を打ち破るのです。

(3) 封建制社会

① 奴隷は強制的に労働させられるた

めにいやいやながら働き、生産性が低く、それ以上上がりません。しかも、労働を強制するための強い監視・罰則体制が必要であり、かつ絶え間ない奴隷の抵抗・逃亡が発生します。

② これに対して、自由に働かせた方が、農民は一生懸命働き、自ら農機具や肥料に工夫と改良を加え、新たな農具を取り入れていくなど、生産力が高がり、そこから年貢取立てや賦役労働をやらせるなどの方が支配者の取り分も多くなります。

③ この結果、その生産形態が多くなり、奴隷制がなくなり、封建制へと移行しました。

④ 奴隷制社会から封建制社会への転換は、奴隷が奴隷主を打ち倒したのでなく、奴隷制社会の中から氏族制度が発展し、すべての部門―牧畜、農耕、家内制工業―の生産の増大は、最初の二つの階級への分裂を生み、奴隷主と被支

配者の奴隷を産みました。そこから、牧畜、農耕での剰余生産物は力の強い男性の所有、女性は家事労働へと押しやられ、第二の性へ転落しました。ここから、国家(支配階級が被支配階級を支配する武力装置)が誕生しましたが、奴隷制度では、奴隷の反乱、枯渴がもとで、生産力の発展に追いつけなくなり、奴隷制では生産力の発展を生かせなくなったからです。

(4) 資本主義社会

① 封建社会内で生産力が発展しました。農業中心、自給自足経済から、商業や手工業が発達し、領主と農民という二大階級の他に、商人・手工業者が増え、かつ力を持つようになりました。② 新たにブルジョアジー(産業資本家)が生まれ、増大し、この手工業と商業の発展に対して、領主は通商に高い税金を課し、手工業を自らに困い込み、製造・販売を独占・規制するなど、

◆みんなの学習講座

生産力の発展を規制し、社会発展の障害・桎梏（しごっこ）となりました。

③ 力を持つてきたブルジョア階級は、通商の自由や生産の自由を主張して、領主と対立し、最終的には領主を打ち倒して通商・生産の自由を手に入れました。つまり、封建社会内にルジョアジーが生まれ、増大し、桎梏となった古い生産関係を打ち倒しました。

④ 資本主義が発達すると、労働者階級の抵抗、運動が強まり、社会主義革命が起こりました。

⑤ 要約すると、資本主義社会の発展が進むにつれ、資本の蓄積は、ますます減少する数の資本家の手中への生産手段の独占、賃金労働者の増大、労働生産力の発展にほかなりません。これが大きくなればなるほど、産業予備軍もまた大きくなります。予備軍が大きくなればなるほど、その沈殿部分たる貧民もまた増大するのです。

これを、「資本主義的蓄積の一般法

則（窮乏化法則）」といいます。

⑥ よって、資本主義社会は歴史的な社会であり、永遠に続くものではありません。社会主義社会は歴史的な必然性です。

⑦ 資本主義という生産関係が、生産力の発展の桎梏となり、資本主義を打ち破ります。しかし、自然に消滅（自動崩壊）するわけではありません。労働者階級が打ち倒す、生産手段を取り戻す階級闘争が必要です。

社会の変化は偶然か、必然か

司会：資本主義社会の発生・発展・衰退については次号で詳しくやります。

今日は、社会の変化は偶然であったのか？ ある法則にもとづく必然だったのか？ をはっきりさせたいと思います。

斎藤：私たちは、2019年1月号く12月号まで『空想から科学へ』に学ぶ」を取り組みました。その時に、自

然は弁証法どおり変化し発展していることは、先人たちが疑いませんでした。

しかし、社会の変化・発展については紆余曲折してきました。これに終止符を打ったのがマルクスです。マルクスはヘーゲル哲学から多くを学びましたが、ヘーゲルの弁証法は観念論で逆立ちしている。唯物弁証法的に社会の歴史的事実を探求し、「今日までのあらゆる社会の（すべての文書により伝えられている）歴史は階級闘争の歴史である」と説きました。

人類誕生から、人間は肩を寄せ合い互いに助け合い約200万年もの永い間、原始共産主義社会で生きてきました。

宮田さんが言うように、労働用具等の改良で剰余生産物ができるようになると、その労働手段を持つ者と持たざる者に分かれ、「階級社会」へ変化しました。古代（奴隷制）社会→封建制社会→資本主義社会へと変化・発展し

てきました。このように社会発展の歴史を唯物弁証法的に解明したのが『唯物史観』と学んできました。

原動力は内部矛盾の衝突

司会：そうですね。それだけでは説明は不十分ですね。変化し発展する原動力

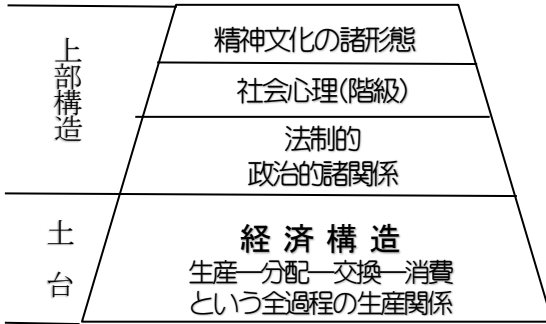


図2 社会の構成図

力はどこに存在するのか、何が原因で変化し発展するのか、分かりやすく説明して下さい。

千葉：人間は誕生の頃から、腹いっぱい食べたい。豊かな暮らしをしたい、という欲求があり、そのために目的意識的に自然に働きかけ生きてきました。生産力が高まるとその時代の生産関係（生産—分配—交換—消費を含めた人間関係）とつり合わなくなると、次の社会へと変化します。（図2参照）

それは、子どもの成長と服の関係に似ています。赤ちゃんから子どもへ、そして子どもから大人へと成長していきます。その成長に合わせて外皮である服も子どもの成長に合わせて変わります。このように、土台である下部構造「経済構造」の変化に合わせて、社会制度である上部構造Ⅱ第一層…法制的・政治的諸関係（国家、政治、法律）、第二層…社会・階級心理（道徳、思想、イデオロギー）、第三層…精神

分化の諸形態（科学、宗教、芸術）が変わることも学んできました。

司会：はいそうですね。私たちは資本主義社会に生まれ、資本主義的学校教育で育ってきました。例えば、学校の歴史教育では、「イイクニ（1919年） つくろろ鎌倉幕府」（最近の教科書では、「イイハコ（1185年） つくろろ鎌倉幕府」と記載されている）と、いつ、なにがあったか、だけでした。

なぜなら、この社会は法則通り、変化発展することを学んでは資本家階級が困るからです。私たち社会の担い手である労働者階級こそ、この『唯物史観』を自らのものにする必要があります。

次回は、それらに基づき、この資本主義社会はどのように発生し、経済構造の変化で「段階の変化」、「局面の変化」を向かえたかを島田実東京東部県協事務局長にレポートしてもらいます。